

『親指Pの修業時代』とホモソーシャルの不可能性

——欲望充足の失敗と男性性規範の作用——

発表者：宇野史也 UNO Fumiya

コメンテーター：杉田俊介(評論家)

司会：陣野俊史

凡例

松浦理英子のテキストは、文庫版『親指Pの修業時代 上・下』（1995年、河出書房新社）を使用し、引用は「巻数：頁数」で示した。また、セジウィックのテキストは、Sedgwick Kosofsky Eve, *Between Men: English Literature and Male Homosocial Desire*, New York: Columbia University Press, 1985 (=2009、上原早苗、亀澤美由紀訳『男同士の絆 イギリス文学とホモソーシャルな欲望』、名古屋大学出版会)を使用し、引用は「セジウィック：頁数」で示した。その他の引用は「著者名出版年数：頁数」で示す。

はじめに

『親指Pの修業時代』（以下、『親指P』）という作品は、松浦理英子の初の長編小説である。同作品は1993年に河出書房新社より出版され、同年に三島賞候補、翌年第33回女流文学賞を受賞しベストセラーとなった。女子大生の右足の親指がペニスに変化するという奇異な物語は、主人公が「親指ペニスを持つことによって、信じ込まされてきた、手垢に塗れた性の通念が本当に通念に過ぎないということを知って行って、自分なりに通念に囚われずに性愛観を発展させて行く」（松浦下：328）という形式の小説である。そしてこの作品のテーマは、「ペニスを男根主義から解放する」¹というものであり、性愛にまつわるステレオタイプが徹底的に疑問に付される。特に、論者が重要であると考えるのは、その過程で周囲の隠蔽された権力関係を浮き彫りにしている点だ。換言すれば、この『親指P』という小説自体がジェンダー批評的な側面を備えていると言える。そうであるならば、この小説読解として意義のある姿勢というのは、物語

が批評しようとしているものを分析することではないか。つまり、ペニスにまつわる男性の権力の構造そのものを問うことに『親指P』という作品を読解する一つの意義があると論者は考える。

本論が分析の際に用いるのは、「ホモソーシャル」の概念である。イヴ・K・セジウィック (Eve Kosofsky Sedgwick, 1950-2009) は、*Between Men: English Literature and Male Homosocial Desire* (= 2009、上原早苗、亀澤美由紀訳『男同士の絆 イギリス文学とホモソーシャルな欲望』、名古屋大学出版会) の中で、男性対女性というジェンダー配置の構造を論じるにあたって、それを取り巻く男性同士の関係を分析している (セジウィック: 357-8)。本論では、男性と権力及び男性性規範の関係性をホモソーシャルの観点から分析することで、『親指P』の読解の可能性を模索したい。結論を先取りして言えば、『親指P』の中で用いられる「性的畸形」というモチーフを足掛かりに、男性の欲望充足の失敗と「ホモソーシャルの不可能性」を考えることで、男性権力の構造について考察したい。また、こうした視座がジェンダー批評の研究における一助になれば幸いである²。

1. ホモソーシャルな欲望と男性性規範

論を始めるに先立って、ホモソーシャルな欲望と男性性規範とがどのように関わり合っているのかということ、上野千鶴子の論を参照しながら説明する。

『男同士の絆——イギリス文学とホモソーシャルな欲望』の中でセジウィックは「女の交換論」と「欲望の三角形」を援用し、女性を周縁化する権力構造を男同士の関係性から明らかにしようとした。ホモソーシャルとは、ホモフォビア・ミソジニー・異性愛主義によって構造化された男同士の社会的な絆を指す。そしてこの男同士の結び付きは必ず、異性愛を経由する (女性を中間項に据える) 形で成されるため、女性は周縁化されジェンダーの非対称性が生じることとなる。ホモソーシャルな欲望とはこのような男同士の社会的な絆を欲望することであるが、その最終目的は、「恋人を共有することによって、男たちが全体としてもっている女性に対する支配権に自分も与る」(セジウィック: 55) というところにある。このようにして男

たちはその権力体制を築き上げているというのがセジウィックの論だ。

これは、ジェンダーの非対称性を生み出すシステムであると同時に、男性性規範としての役割を果たしてもいと考えられる。上野千鶴子はミソジニーについて言及するうえでセジウィックの「ホモソーシャル」を念頭に置いて次のように述べる。

男は女との対関係のなかで「男になる」のだ、とっていた。まちがいだった。男は男たちの集団に同一化することをつうじて「男になる」。男を「男にする」のは、他の男たちであり、男が「男になった」ことを承認するの、他の男たちである（上野2018:284）。

つまり、「ホモソーシャルな連帯とは性的主体（と認め合った者）同士の連帯」（上野2018:32）であり、男性にとってこの連帯に加わることは、男性としてのアイデンティティ（性的主体性）を確立することを意味するのだ。このように見ても、男性にとってホモソーシャルな欲望とは、男性性規範への同一化の欲望であると言える。

ホモソーシャルの構造において重要な点は、連帯に加わる前提条件として異性愛（女性の所有）の経路があることである。この文脈において異性愛的欲望とは「女性の体内や身体を通して権威のある男性と連帯したいという」（セジウィック:59）欲望と定義される。「ホモソーシャルな男が自分の性的主体性を確認するためのしかけが、女を性的客体とすることである。裏返しに言えば、女を性的客体とすることを互いに承認しあうことによって、性的主体間の相互承認と連帯が成立する」（上野2018:33）。男性は、「女を（最低ひとは）モノにする」（同上）ことを連帯に加わる最低条件として求められるのだ³。つまり、異性愛とホモソーシャルな欲望は地続きであると言える。そして、この事実がゆえにホモソーシャルな欲望は不可能性を孕むのではないか、というのが本論の仮説である。

『親指P』という小説に登場する男性登場人物たちの中には、ホモソーシャルな人物が二人いる。一人は、主人公・真野一実の最初の恋人である小宮正夫であり、もう一人は物語中盤で登場するフリークス集団“フラワーショー⁴”のメンバーの一人の児玉保という人物

だ。この二人の人物の欲望を、彼らの性行為に即して分析することで、ホモソーシャルの不可能性がもたらす影響について考察していく。

2. ホモソーシャルな欲望の内面化:小宮正夫の例

現代において、ホモソーシャルな欲望は規範として内面化されているのではないか。主人公・真野一実の婚約者である小宮正夫は、「もっとも〈ノーマルな〉性規範に従う男性」(深津2006:94)として設計されている。つまり、彼は自身の持つ規範意識や欲望に対して無自覚であり、ホモソーシャルな欲望を循環させることができる人物である。物語序盤における一実は、「異性とはいいものだ。同性とは相手がどんなに魅力的でも友達にしかねないが、異性となら友達になると同時に恋人や結婚相手にもなれる。」(上:46)と語っている。こうした彼女のステレオタイプの助けもあって、正夫の異性愛は比較的安定したものとなっている。しかし、隠蔽された権力関係を顕在化させるような疑似男根である親指ペニスの出現によって一実の性愛観は徐々に変化していく。そしてその過程で、正夫の男性優位主義的権力関係に亀裂が生じ、二人の関係性は崩壊してしまう(小谷2006:82-3)。そして、このことが正夫のホモソーシャルな欲望を浮き彫りにしてもいる。

正夫の抱く異性愛のイメージは、内面化されたホモソーシャルな欲望を示している。それは、口唇性交に対する偏愛という彼の嗜好性によく表れている。正夫は一実との性行為の場面で、「フェラチオしてもらっては好きだよ。愛されているという感じがするからね。女の子って、本当に男を好きじゃなければ口に含んだりしないだろう?」(上:67)と語る。一方で、一実はこの発言に対して違和感を抱き、正夫に問い詰める⁵。

「それって、ペニスとはとにかく汚い物だという前提に立ってない?汚い物なのに口に含んでもらえるから、愛されてると感じるわけでしょう?」

「そうだよ。」正夫は頷いた。

「そこまでしてもらわないと、深く愛されてると思えないの？」
「そんなことはないけど、深く愛されてると思いたいじゃないか。」(上：67-68)。

ここには正夫の異性愛のイメージが凝縮されている。深津謙一郎は、正夫のこうした嗜好性には支配のシンボルという過剰な物語が附着していると指摘する。彼がここで言外に求めているのは、自分の「汚い物」を啜るパートナーの従属を視認することで一実を支配する快樂であり、そこでは特権化されたペニス(支配)とヴァギナ(従属)という性愛の権力関係が再生産されている(深津2006：94-5)。ここから、正夫の言う「愛情」が「従属」と同義であることは明らかだ。つまり、正夫の抱く異性愛とは、支配と従属の物語なのである。

異性愛が支配と従属の物語であるのはなぜか。一実の「そもそもなぜそれほどまでして安心感と信頼感を得なければ気がすまないのか」(上：63)という問いは核心をついている。つまり、正夫の従属を求める心理の裏側には常に、パートナーの裏切りに対する「不安と猜疑心」(同上)がある。セジウィックは、ホモソーシャルな絆を論じるにあたって、ジラルルの欲望の三角形という図式を採用し、「愛の主体と対象を結びつける絆よりも、ライヴァル同士の絆のほうがずっと強固であり行為と選択を決定する」(セジウィック：32)のだと述べる。「不安と猜疑心」は、正夫が一実との関係性の外側に他の特定の(あるいは不特定の)男性を想定していることを表している。そして、それが一実に対する行動の決定要因となっているのだ。このことから、正夫の異性愛の先にはホモソーシャルな欲望が潜在していると言える。換言すれば、正夫の異性愛が支配と従属の物語であるのは、「不安と猜疑心」が示すホモソーシャルな欲望に裏打ちされているからなのである。だがそれは必ずしも正夫を脅かすものではない。なぜならそれは常にホモソーシャルな可能性へと開かれているからだ⁶。

ここで重要なのは、なぜ「不安と猜疑心」がホモソーシャルな欲望を示しているのか、ということだ。社会学者であり男性性研究者である伊藤公雄は、70年代から始まったウーマン・リブをきっかけに近代の〈女らしさ〉〈男らしさ〉のイメージが崩壊しはじめ、90

年代になると男性たちは「甘え依存してきた『太母』たちが自分を突きはなし始めたことに、深い不安を感じつつある」（伊藤2009：73）と述べる。また、上野は小谷野敦や内田樹の「性的弱者論」を性の自由市場を怨嗟する声だと批判したうえで、「規制緩和」される以前の高度成長期の日本の結婚市場では、男性はパートナーを見つけることに努力する必要はなかったのに対して、性の自由市場である現代は、男にもまた「対人関係の技術」が要求されるようになった時代だと述べる。（上野2018：66）。つまり、1990年代以降は、男性にとってそもそも異性愛を成立させること自体がある種の困難を伴う時代である。この時代背景と『親指P』が書かれた時期とは符号する。つまり、正夫の抱く不安と猜疑心には「性の自由市場化」という時代的な要因があると考えられる。そして、異性愛を支配と従属の物語とし、それが不安と猜疑心に支えられたものであるということは、正夫がホモソーシャルな欲望を規範として内面化しているということの証左である。つまり、小宮正夫という人物は、現代版ホモソーシャルな男性のプロトタイプだと言うことができる。

3. 欲望充足の失敗と不可能性：児玉保の例

児玉保は、性的畸形である。彼は、弟の身体が自身の身体に埋没したシャム双生児という設定であり、彼の抱える身体的なハンディキャップは、特に男性器に関するものである。「彼のペニスは股間ではなくもっと上の下腹から突き出すようについていた」（上：277）と描写されるこのペニスは、実は彼自身のものではなく埋没した弟のペニスである。そして彼は性行為を行う際には常に弟のペニスを使用しなければならない。「保が女の体を見たり触ったりしても慎⁷のペニスには昂奮が伝わらず、慎のペニスを刺戟しても保は快感を得られない」（下：278）のであり、この意味で彼は不能と言える。そして、保が「俺は俺自身の男根がほしいんだ」（上：320）と語ることから、「男性器の欠損」が彼のアイデンティティに亀裂をもたらしていることがわかる。この亀裂は、正夫と同様に性行為において全面化するが、その性質は全く異なるものとなっている。口唇性交一つとっても保の状況は切迫している。“フラワー・ショー”の公演を終

えて戻ってきた保は、パートナーである水尾映子の眼前に（弟の）性器を突きつけて「舐めろ」（上：358）と直接的な要求をする。映子に「あなたが気持ちよくなるわけじゃないでしょう？」（同上）と問われると「なるさ。気持ちよくなるさ。他人にはわからないだろうけど、このペニスで俺は感じるんだ」（同上）と答える。無論、弟のペニスへの刺激で彼自身が即物的な快楽を得ることはない。だとすれば、ここで保が感じる「気持ちよさ」とは正夫と同様、精神的な快楽である。

保自身の言をかりるなら、彼は〈完全なペニスの快楽を感じることはできないけど〉、〈頭でイメージして生まれる快楽〉には耽ることができる。（中略）保が快楽を感じる（という）彼の〈想像上のペニス〉は、映子を《支配》する—映子の従属を視認することで屹立するのである（深津2006：96）。

しかし正夫の場合と違うのは、保の感じるそれは純粹に精神的なものだということだ。このことから、保もまた正夫と同様にホモソーシャルな欲望を規範として内面化しているということ、そして保の場合それが正夫よりも切迫しているということがわかる。こうした保の行動は作中で何度も繰り返され、それは決まって衆目の中で行われる。

この保のおよそ狂気とも言える行動の裏には何があるのだろうか。江種満子は保の性行為を以下のように説明している。

シャム双生児の生き残りの彼は、自身の奇形を自覚すればするほど、ペニスをもってヴァギナに結合すべしとする世上のセックス神話＝ジェンダーに脅迫されずにはいられない。だから彼は、シャム双生児の片割れの所有になる〈他人のペニス〉を用いて、しかもジェンダーという他人のセックス神話に服した性行為に執着する。そうしなければ一人前の男ではない、という強迫観念にとりつかれているからだ（江種2006：79）。

性の自由市場では、恋愛資源の多寡に応じて、性的強者と性的弱者とが生まれる⁸（上野2018：61）。これを「非モテ問題」⁹と呼ぶこと

ができる。この非モテとは、異性愛が成立不可能な状態であり、そのことが保の強迫観念へと繋がっている。「非モテとは、何よりもまず、ある種の思考回路の問題、自己評価の極端な低さの問題である。」(杉田2016:100)。そして、自身の男性器を持たない保は、性器結合中心主義の下では性的弱者となり、自己評価の低さは性器の問題に収斂する。一実に対する「今度、本当に俺と合体して、映子を欲ばせてやってくれよ」(上:339)という保の言葉には、規範意識と現実との齟齬がよく表れている。つまり、保の非モテ意識とは「性的にパートナーを満足させることができない男」であるという思い込みのことである。当然この「満足」は「従属」であり、保の非モテ意識の裏側には規範として内面化されたホモソーシャルな欲望がある。しかし、支配のシンボルであるペニスを持たない保にとって、異性愛欲望を充足させることは常に失敗に終わってしまう。このことは、保のホモソーシャルな欲望が到達不可能であることを示し、それゆえに彼は幾度となく同じ行動を繰り返すのである。

保の例から、規範が常に到達不可能なものとして存在するために、繰り返される欲望充足の失敗がやがて強迫観念的な同一化の要請として作用することがわかる。したがって、彼の健全なペニスへの羨望は権力への羨望であり、セックス神話への執着は文字通り「女性の体内や身体を通して権威のある男性と連帯したい」という欲望の表れなのである。「そもそも保という特異な人物設定は、彼をとらえる男根主義が、《支配》の物語への自己疎外、すなわち、ペニスそれ自体の快楽からの疎外」(深津2016:97)ということのシンボルであった。換言すれば、保という人物は、ホモソーシャルの不可能性の象徴なのである。非モテ問題とは異性愛欲望の充足の失敗を意味し、それはホモソーシャルの不可能性を示している。だからこそ、普通のセックスにこだわらないという映子の声も愛情も、保には届かないのである。

4. ホモソーシャルの不可能性は何を意味するか?

最後に主張したいのは、ホモソーシャルの不可能性は、規範としてのホモソーシャルを再生産し、既存の権力体制やジェンダーの非

対称性を補強していのではないか、ということだ。

こうした負の連鎖は、ホモフォビアの構造と類似している。ホモフォビアとは、セジウィックによればテロのような提喩的構造を取るといふ。それは、特定の弾圧を少数派に加えることで多数派の行動を統制するメカニズムであるとされる。

いわゆる同性愛のサブカルチャーとは無縁の男性たちをも強力に統制するためには、もっと巧妙かつ有益な戦略が必要であった。すなわち、自身がホモフォビックな「無差別」攻撃を受けるのかどうか、同性愛者にわからないようにしておかなければならない (must not) のはもちろん、「自分は同性愛者ではない」(他の男性との絆が同性愛的ではない) という確信を誰ひとりとして持ちえないようにしておかなければならなかった (must not) のである (セジウィック:135)。

この統制のメカニズムはつまり、脅威によって男性たちにホモフォビアという規範への同一化を強いるものだ。そして、ホモソーシャルの不可能性にもこうした側面があるのではないか。つまり、性の自由市場下にある男性は常にホモソーシャルな不可能性という「脅威」にさらされており、これは「非モテ」問題として顕在化しているのではないか。正夫もその例に漏れず、特に保にはそうした意識が顕著であり、性的畸形という松浦のモチーフはそれを見事に描き出していた。杉田俊介は、男性の「非モテ」問題はねじれた被害者意識やルサンチマンへと拡大していくと論じている (杉田2016: 62-139)。事実、欲望充足の失敗を繰り返すことで、欲望の規範化、同一化の要請、ホモソーシャルの再生産といったサイクルが生み出されていた。つまり、ホモソーシャルの不可能性もまた、「男同士との絆を世俗的により円滑に統制」(セジウィック:135) するための機能を担っていると見える。

「女性にとって、男性のホモソーシャルな欲望が異性愛を経由することは、その欲望が達成されるか否かにほぼかわらず、害となりうる」(セジウィック:76)。これまで見てきたように、正夫にせよ保にせよ、彼らの異性愛欲望は「自分を『男にしてくれる』ひとりよがりな『女の所有』への欲望」(上野2018: 81) に過ぎず、それは

パートナーを関係性から疎外する結果にしかならなかった。ホモソーシャルな不可能性が生じるということ自体、ヘテロ男性という特権階級に固有の問題である。そして、こうした特権的な立場から生じる問題は、それ自体が暴力であって苦悩ではない。男性性批判において重要なのは、こうした「男性問題」を、既存のジェンダー観に当てはめて批判することではないのかもしれない。ジェンダーという支配構造から人々を解放するためにはむしろ、問題自体のメカニズムをどこまでも徹底的に解体していくことが必要なのではないか。『親指Pの修業時代』というテキストの畸形というモチーフは、この「解体」作業を試みているのである。

[注]

- 1 江種満子は『『親指Pの修業時代』——〈私自身の要求〉を生きたい』の中で「生殖を目指す異性愛中心主義といったカノンに単一化された近代のセクシュアリティに異議を申し立て、もっと自由な性愛を奔放に構想することをテキストの推進力としている」と指摘している。実際に松浦も文庫版のあとがき「親指ペニスとは何か」（1995、『親指ペニスの修業時代 下』、河出書房新社）で「この小説は性器結合中心の性愛観に対する批判」と述べたうえで、「男根主義という見かたで、何かと昨今悪者にされがちなペニスを、本来無垢な器官として備わっていたはずの生まれたままの物に戻してやる」と述べている。
- 2 新田恵子は男性学の意義と両義性に触れて次のように述べる。「では、男性学が覇権的男性性批判であり続けるために重要な点は何か。まず、もとより暗黙には『ヘテロ男性学』になりかねないこの分野が、異性愛主義の暴力に敏感であることが望まれる。それにはまさに、曖昧な性表象や同性愛的現象に『男の規範』がいかにも不寛容であったか、その内実を探らねばならない。さらに、規範的ジェンダー観が『男のものではない』としてきた『個人的な』要素——セクシュアリティ、情動、親密性等——を主題とし、男性性の危機ではなく不可能性の方を詳らかにすることが必要であろう」（新田2006:107）。新田のこの指摘に基づいて、ジェンダー批判的な観点からテキストに組み込まれた権力関係をただ批判するのではなく、その権力構造の内実、特に不可能性を分析することがこれからの批評には必要なのではないか。
- 3 この異性愛主義は、ホモフォビアと抱き合わせの構造である。「セジウィックのホモソーシャルの議論における功績は、この『異性愛の経由』がホモフォビアによるものと看破した点にある」（セジウィック:358）。つまり、男性は自身の同性愛的欲望を隠蔽するために異性愛を経由することで、他の男性との「社会的な絆」を獲得する。セジウィックの論点は、ホモソーシャルな欲望とホモセクシュアルな欲望はホモフォビアによって分断されているが、実は本来的に不可分であることを指摘することであった。しかし、本論で焦点をあてるのはあくまで男性性と権力構造の問題であるため、隠蔽された同性愛欲望の問題までは言及しない。
- 4 物語の中で主要な位置を占める、セックス・ショーを行う興行集団。メンバーたちは皆、性的奇形であり、主人公の真野一実もこの集団に加わり共に旅をする。
- 5 一実が正夫の発言に違和感を抱く理由の一つとして、正夫が「他人のペニス嫌い」

- (上:77)であることが挙げられる。一実は、「女もまたペニスを汚い物と思っているのでなければ彼の欲びが深まらないと言外に語っている。もしかすると、彼がフェラチオで得る欲びは残酷な性質のものではあるまいか」(松浦上:68)と語っており、正夫の口唇性交に付着した意味を示唆している。
- 6 実際、正夫は友人である岩合晴彦と「他人の入り込む余地のない濃密な交流」(上:58)があり、それは一実を介した場面で噴出する。本編において、この場面で正夫のホモソーシャルな関係性が露わになる。『親指Pの修業時代 上』chapter1-3 (23頁-124頁) 参照
- 7 保の身体に埋没した弟である人物。
- 8 上野はこの文章の主語の性別が「男性」であり、女性の性的弱者について考慮されていないことを指摘して、これは単なる男権主義のミソジニーに過ぎないと批判している(上野2018:61-81)。しかし、本論は男性問題についての論考であるため、敢えてこの言説を採用する。しかし、目的は上野と同じく、男権主義批判にある。
- 9 異性からの性的承認を過剰に求め、「なぜ自分はモテないのか」という悩みを過度にこじらせた状態が、ネットやメディア上で1990年代半ば辺りから、「モテない問題」「非モテ問題」と呼ばれるものを形成してきた(杉田2016:84)

[引用・参考文献]

- Sedgwick Kosofsky Eve, *Between Men: English Literature and Male Homosocial Desire*, New York: Columbia University Press, 1985 (=2009、上原早苗、亀澤美由紀訳『男同士の間——イギリス文学とホモソーシャルな欲望』、名古屋大学出版会)
- 伊藤公雄「男の性もまたひとつではない」天野正子・伊藤公雄・伊藤るり・井上輝子・上野千鶴子・江原由美子・大沢真理・加納実紀代編『新編日本のフェミニズム12 男性学』、岩波書店、2009年、67頁-96頁
- 上野千鶴子『女嫌い ニッポンのミソジニー』、朝日新聞出版、2016年
- 江種満子『「親指Pの修業時代」——〈私自身の要求〉を生きたい』清水良典編『松浦理英子 現代女性作家読本⑤』、鼎書房、2006年、76頁-81頁
- 小谷真理「もうひとつの“目覚め”」清水良典編『松浦理英子 現代女性作家読本⑤』、鼎書房、2006年、82頁-87頁
- 杉田俊介『非モテの品格——男にとって「弱さ」とは何か』集英社、2016年
- 杉山欣也『「親指Pの修業時代」——物語と小説のあいだ』清水良典編『松浦理英子 現代女性作家読本⑤』、鼎書房、2006年、88頁-93頁
- 新田恵子「ジェンダー系批評① 男性学の文脈とジェンダー批評の意義」大橋洋一編『現代批評理論のすべて』、新書館、2006年、104頁-107頁
- 深津謙一郎『「親指Pの修業時代」——「性的奇形」としての男根主義——』清水良典編『松浦理英子 現代女性作家読本⑤』、鼎書房、2006年、94頁-97頁
- 松浦理英子『親指Pの修業時代 上』、河出書房新社、1995年
- 松浦理英子『親指Pの修業時代 下』、河出書房新社、1995年
- 三浦玲一「クィア批評② ホモソーシャルの発見」大橋洋一編『現代批評理論のすべて』、新書館、2006年、112-115頁

陣野 まず、杉田さんがどうお聞きになったかを伺わせてください。

杉田 アカデミズムの場ということで「生産的かつ批判的」なコメントを志そうと思うのですが、主に4点あります。男性学やメンズリブの視点からコメントさせていただきます。

その前に大前提として、松浦理英子さんは、レズビアンとかマゾヒズムといった形で概念的にくくられるのを嫌う人で、個々人のセクシュアリティが存在しているだけで、関係においてそういうものが立ち上がってくるだけで、と考えていると思うのですが、そうするとこういう場で論じるのは難しくなるので、ここではそういうタームも使うことを断っておきます。

1点目として、『親指Pの修業時代』（以下、『親指P』）というテキストを読むという、まず素朴な次元の問題です。宇野さんの論考は正夫と保という2人の人物を中心に読解していますが、このテキストでは、主人公の女性、それから春志という男の子との関係、そして映子という女性とのレズビアニズム的な関係が結構重要なものになってくるので、それがどうなっているのか気になるところです。例えば、春志という男の子は盲目の美少年のピアニストです。保もシヤム双生児だし、ほかにもフリーク男性がたくさん出てきます。障害者や病者の多さが松浦作品では結構目立ちます。彼らの男性性をシスヘテロ（異性愛男性）である男性の正夫とどこまで一緒にできるかという問題がある。近年のジェンダー批評、フェミニズム批評の水準で言うと、いわゆる第三波フェミニズム以降は、インターセクシュナリティや複合差別、つまり女性差別、障害者差別、民族差別、それから動物や植物の話題などもあるかもしれませんが、それらの問題を複合的に、連立方程式的に考えていくのが重要になってきます。例えば松浦さんの場合は人間と犬の関係も重要で、それこそジル・ドゥルーズやダナ・ハラウェイみたいな議論もありますが、その辺をどう考えるかは、『親指P』においても重要ではないか。主人公は、正夫、春志、映子というふうに関係を遍歴していきます。正夫はベタベタなマッチョな男。二番目の春志はセクシュアリティに

揺らぎがあって、バイセクシュアルだし、盲目という障害もある。また三番目の映子とはレズビアン的な関係になります。でも、主人公は、正夫は論外としても、最後には男性である春志との関係に着陸するんですね。これは松浦さんの作品としては結構珍しい。基本的に女性とのシスターフッド的な関係に特権的なものを見つめていく松浦さんが、教養小説的というか、ビルドゥングス・ロマン的な構造を持つこの作品で、春志との関係に落ち着くという結論をどう考えればいいか。それは松浦さんの全作品における位置づけとして気になるところでした。

2点目は理論的な問題です。宇野さんの論文は、セジュウィックの理論を中心として、性的自由市場が発達して男性が不安を感じるようになり、過剰なホモソーシャルリティを規範化していくけれどもそれは常に失敗し、失敗すればするほど、男性は暴力的になって、権力的になっていく——という図式だと思います。しかし近年の学問的な達成からすれば、ホモソーシャルリティのレベルにも複数のレイヤーがあるのではないかと。例えば、松浦さんの作品は基本的に女性のホモソーシャルリティを描いています（ここでホモソーシャルリティという言葉を使っていいかにも議論が必要です）。それを手放しでユートピア化することの問題があります。それは例えばジュディス・バトラーなどが批判的に検討していますし、近年だと、いわゆる「腐女子」と呼ばれる人たちの男性ポルノの表象の問題や、レズビアン女性同士のDV関係、それから一部のフェミニストを自称する人たちのトランスジェンダー差別の問題があります。先ほどのインターセクショナリティもそうですが、近年は女性同士の関係がはらむ権力や暴力みたいな話も論じられるようになってきています。実際、松浦さんは、十代から二十代前半のレズビアン的でマゾヒズム的な女性同士の関係がある種の暴力に陥っていく光景を何度も描いています。だとすればやはり男性のホモソーシャルリティと同時に、松浦作品に即して、女性のホモソーシャルリティの権力性や暴力性が批判的に問われなければならないのではないかと。

もう1点つけ加えると、最近よく草食系男子のホモソーシャルリティみたいな話も言われます。松浦作品には、しばしば優しく無垢な美少年みたいな男の子が出てきますけれども。例えばヒモのような関係であったり、ある種の性産業に従事していたり、ある種のアイ

ドル的な男性が、一見すると女性に優しいけれども、実は女性たちを搾取していると。しかもセクシズム的な社会構造を変えることには無関心であると。とすれば、肉食系の男性に対して、草食系男子のイメージをぶつけるだけでいいのかと。『親指P』においても、春志という見かけは草食系でバイセクシュアルの男の子の暴力性や、ある種の無神経さみたいなものがしつこく描かれています。この辺の関係は、宇野さんの書かれた、マッチョなほうのホモソーシャリティとは違う分析が必要ではないかと思いました。

3点目は、読書とジェンダーの問題についてどう考えればいいのか。これは批判的な意味ではないのですが、松浦作品の中には確実にミサンドリー（男性憎悪）があります。宇野さんのセクシュアリティはわかりませんが、例えば僕はシスヘテロの男性です。そういう人間が松浦さんのテキストをどう読むのか。そういうものすごく素朴な疑問にどうしても突き当たるわけです。シスヘテロ男性として松浦作品を読むということの、根本的なきつさをごまかしてはダメなのではないか。悪い意味ではなく、そのきつさにどう向き合っていけばいいのかが、やはり問われてくると思いました。例えば、最初の短編である「葬儀の日」でも、若い女性同士の関係が特権的なものとしてあって、最後に美少年みたいな男の子とセックスするけれども、やっぱり根本的に女性の側に愛がないから、少年は出ていく。あるいは、「乾く夏」という作品でも、女二人と男一人では三角関係にはならないというか、男がちょっと当て馬みたいに使われたりする。最初の長編『セバスチャン』では、男の子が出てきて最後にセックスしようとするけれども、いきなり主人公が彼を突き飛ばすという場面があって、それは嫉妬でもなく怒りでもなく、純粹な嫌悪感だというんです。「いっそのこと、この人が男でなかったらどんなにいいか」みたいな話をする。その次の『ナチュラル・ウーマン』ではもう完全に男性の存在は排除されて、主人公の女性と3人の女性たちの関係が描かれていく。『親指P』では、「もしも1日だけ男に生まれ変わったらどうする」という問いに対して、「去勢しろ！」と言うわけです。これはすごい言葉ですね。重要な問いかけだとも思います。「あとがき」代替りの文庫版の講演では、ペニスの役割を暴力的に切断するのではなく、限りなく無力化していく。優しく去勢して行って、ある種、クリトリスのような機能に近づけてい

く。非暴力的な去勢と言うべきか、松浦さんはそういう試みがしたいんだと言うわけです。去勢しているのに非暴力。これもすごい言葉ですね。この問いを読者の男性としてどう受けとめるか。例えば、松浦さんの『献身』という作品では、最初のほうに出てくる、主人公の女性の仕事のパートナーである編集長の身体描写がかなりすごくて、男のだらしなさと、男の体の汚らしさみたいなものを徹底的に描写しているんですね。それから『奇貨』という作品。珍しく男性が語り手の作品です。その男は糖尿病が悪化しペニスが不能化しているんですね。つまり、優しい去勢が済んだ男性だから、松浦作品の主人公になりうる。けれども、驚くべきことに、そうした去勢ずみの男性ですら、ルームシェアした女性に対して盗聴という暴力的なことをしてしまう。すごくてねじれた作品になっています。こういう作品を、括弧つきの「男」たちはどう読めばいいのか。ジェンダー批評を男性側に切り返すということ、男性学やメンズリブの問いを読書行為や批評行為のほうに差し向けるにはどうすればいいのか。そのあたりはまだ十分に議論されていない気がします。一般的な「男は悪いよね」ではなく、男としてのこの自分の身体のきしみとか痛みみたいなものによって、どうやって松浦作品を読むのか。松浦作品によく出てくる女性のマゾヒズムとは違う、男性的なある種のマゾヒズムによって読むしかないというか、常に批判されながら、存在を抹消されながら読むしかないのだろうか。そういう行為によって、シスヘテロ的な欲望を変えたり、自分の身体というのをどうやって生成変化させられるかという話は、これから必要な問いなのかなと思っています。

最後に、4点目です。男性の新たな規範性というか、男性の生き方のモデルの問題について。例えば今、MeToo的なもの、第四波フェミニズム的なものが世界を動かしていますが、それに対して、有毒な男らしさから降りよう、男性の既得権を手放そう、といったことが言われます。それはまったく正しい。でも男性たちは、同時に、降りた先でどうするかを考えないと、ひたすら自己批判して終わってしまう。それなら、新しい男性性のモデルをどう定義するか。リベラルな男性とか、イクメンとか、草食系男子だけで本当にいいのか。例えば、レイチェル・ギーザの『ボーイズ』という本があります。ギーザはそれこそレズビアニズム的なパートナーのいる、複合

差別的な状況を背負った女性なのですが、彼女は自分の養子として異民族の男の子を育てるんですね。ところが、そういう複合差別的な交差性が日常的に前提となった世界の中でも、子どもの中にやはり男らしさが生き延びてしまうというか、自分の子どもにそれが継承されてしまう。そのことに驚いたというんです。だとしたら、どうすれば新しいモデルを子どもの世代に提示できるかと。あるいは、異性装者のグレイソン・ペリーという人の『男らしさの終焉』という本があって、白人男性のマッチョイズムみたいなものはもちろん駄目だけど、一方で、リベラルで優等生的な男性たちの危うさを批判しています。経済的余裕もあってリベラルな考え方を持つ男性たちが、女性に優しい男性性を身にまとい、そうなれない世の男性を叩いている。フェミニズムを使ったマウンティングというか、それ自体が権力になっていく。そのことに無自覚だ、みたいな話をしています。男性性の在り方についても、そうした問題を含めて、ややこしくて厄介な領域に入ってきていると思います。そうした状況の中で、セジュウィックの理論を使って、ある種の典型的な男性たちのホモソーシャリティを批判して、それで終わりで済むのか。むしろ松浦作品を読解することによって、新しい男性モデルを提示していくところまで踏み込んでいくと、さらにもう一步議論が深まるのではないかと思う。そういう松浦理英子論というのを読んでみたいと思いました。これは自戒を込めて言うのですが、松浦作品を僕みたいなシスヘテロが読むと、下手をすると優しく去勢されて終わりということになりかねません。それはセジュウィックが批判するような権力とは別の権力として機能してしまうかもしれない。その辺にも自覚的でありながら、男性性がどういう方向に変化していけるのか。その可能性みたいなものを批評していけるのではないか、と思いました。

以上4点、宇野さんの評論を読んだ感想としてコメントさせていただきました。

陣野 大変、生産的な議論で、セジュウィックを使いながら松浦作品を見ていくという見取り図が持っている危うさと生産性みたいなところが、今の4つの指摘の中にはあったと思います。特に3点目の、自分の男性性みたいなものが松浦さんの小説を読んだ時に危うくなる、その危うさをどうやって読書の中に生かすか、反映させ

ることができるかが、重要なポイントではないかと思いながら聞いていました。

また、セジュウィック以降の大きな流れの中でも、当然、松浦作品を読み返すべきだと思います。僕は『奇貨』の中に出てくる小説家が私小説家であるところにばかり気がいって、彼が糖尿だというのは忘れていたので、ハッとするような指摘がたくさんありました。杉田さん、本当にありがとうございました。